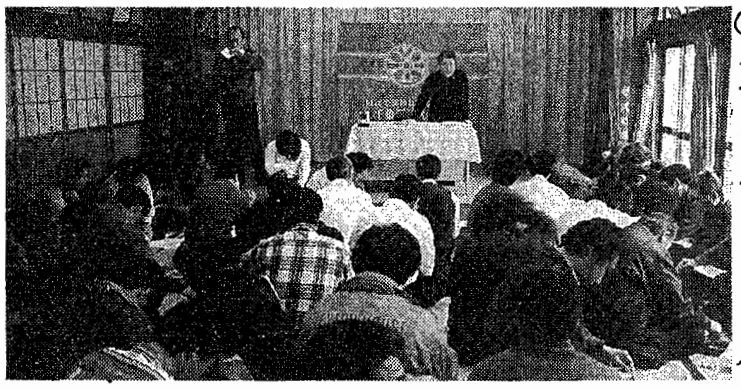
日刊 動労千葉

国鉄千葉動力車労働組合
〒260 千葉市中央区要町2番8号（動力車会館）
電話｛（鉄電） 千葉 2935・2936番
（公） 043（222）7207番

93.4.5 No.3771



（左）千葉転支部スト突入集会

4・1-2スト貫徹したぞ！

四月一日、われわれは春季第三波ストライキを、本線運転士が正午より、営業関係の強制配転者が自らの原職奪還をかけ、貨物の地上勤務者が九三新賃金の超低額回答と日貨労の裏切り妥結糾弾の闘いに決起した。

その怒りを結集した、夕刻の「スト貫徹、動労千葉総決起集会」は、千葉市民会館に新小岩・津田沼・幕張・千葉転・京葉・総武・佐倉支部組合員二三〇名が、ストライキの熱気と意気を持ちよるものとなった。（他支部は各拠点において、同時刻総決起集会を開催）

ウソをつくな!!

千葉支社「申入書」を弾劾する

動労千葉は、組合つぶしのみに憂き身をやつし、ストライキの回避へ向けた努力すら一切放棄する不誠実な対応を繰り返し、ストの立上がりに対してさえ、「無価値労働」などと称して一方的に就労を認めないどころか、運転法規と安全を無視した運転取り扱いを一方的に強制する千葉支社の不当な対応に対し、四月二日正午以降も一部戦術を拡大し、ストライキを続行した。

ところが千葉支社は、これに対し、四月二日朝、動労千葉敵視の意志のみをむき出しにした申し入れを行なってきた。「かかる行為を直ちに中止せよ」と称するこの「申入書」は、まさにウソとペテンでぬり固められた、と言う以外表現のしようのない代物である。

「申入書」はまず、「団体交渉等で誠実に対応してきたにもかかわらず、予定どおりストライキを実施した」と称する。しかし、事実はどうか。

千葉支社は、スト前日の団体交渉に至っても、わずか一行の回答で、組合の要求をはねつけ、しかも、局面打開のために申し入れたトップ交渉の開催すら、「トップ交渉を開くまでもなく回答している」などと称して、これを拒否したのだ。これが千葉支社の言う「誠実な対応」の正体である。

さらに、「申入書」は、動労千葉が「ストライキ終了時の立ち上がりに一切協力せず」ストを延長したと動労千葉を非難する。しかし、事実は全く逆である。この間、「無価値労働」などと称してスト終了後、就労しようとしても認めず、賃金カットを続けたのは当局だ。今回も、点呼を行なって乗務するという、運転法規に定められている、安全を守るための最低限条件について、われわれは、「送り込みのために十二時前に点呼をとる必要がある者がいれば個別にストを解除してもいい」とまで、問題を提起した。これに対し、一旦は「検討させてほしい」と回答しておきながら、結局これを拒否したのは当局である。

「申入書」は、「労使の信義則に反する」「社会的責任を放棄」「厳重に抗議する」等叫びたてるが、これらの言葉は、そっくり当局に投げ返す他はない。しかし、この「申入書」を見ていると、組合潰しのみを最優先するあまり、物ごとをトータルに判断する組織としての批判力を鈍化させてしまい、その結果泥沼の悪循環に陥り、そうなればなるほど更にいきり起つという、JR組織の末期症状を見る思いがする。

（写真）4・1-2スト貫徹集会に230名が結集